

はじめは、ちぎれ雲が浮んでいるように見えた。浮んで、それから風に少しばかり、右と吹かれているようでもあった。

台所の隅の小窓は、丈の高い板塀に、人の通れぬほどの近さで接していた。その畳リガラスを中から見れば、映写室の仄暗いスクリーンのようなようだった。板塀に小さな節穴がいくつかあるらしい。粗末なスクリーンには、幅三メートルほどの小路をおいて北向うにある生籬の縁が、いつもぼんやりと映っていた。

狭い小路を人が通ると、窓いっぱいはその姿が像を結ぶ。カメラ・オブスキュラー―暗箱と同じ原理だろう、暗い室内から見ていると、晴れた日はことに鮮やかに、通り過ぎる人が倒立して見えた。そればかりか、過ぎていく像は、実際に歩いていく向きとは逆の方へ過ぎていった。通過者が穴にもっとも近づいたとき、逆立ちしたその姿は窓をあふれるほどにも大きくふくれあがり、過ぎると、特別な光学的現象のように、あっという間にはかなく消えた。

ところが、その日あらわれたちぎれ雲の像は、なかなか過ぎようとしなかった。それでいて、穴に近づいてきてもさほど大きくはならなかった。いちばんふくれあがっているはずの地点にあっても、窓の上部で、掌に載るほどの大きさとどまつていた。ちぎれ雲はためらうように道にたゆたい、それから、ようやくかすかな啼き声が出た。

その小路は妻と決めて、稲妻小路と呼んでいた。

新宿から南西に伸びる私鉄に乗って二十分ほど、急行の停まらない小さな駅を降りてから南へ十分ほど歩くと、わずかな丘にさしかかる。丘の上の、そこだけ交通量のある東西の道を斜交いに渡ると、その先は下り坂に変わった。やや広いならだら坂を七十メートルほど下った左に、練塀の下半分に割竹を縦に張りめぐらした古風な門構えの家があった。手前で左へ入ると、囲いは簡素になって、板塀に沿う小路となる。

借りていた住いには、その練塀と板塀に囲われた広い敷地内の離れだった。板塀の中ほど過ぎに板の潜り戸があって、大家の勝手口と店子の門とを兼ねていた。節穴はその潜り戸の先にひらく、気づかれることのない目のようであった。

板塀の裏の、嵌殺しにひとしい窓へ、自分がどんなに明らさまに映し出されているかも知らずその前を通り過ぎると、左から張り出してくる家の煉瓦塀に突き当たって、右にちょっと鋭角に折れる。と思うと、大きな樺の繁りが屋根を蔽っている家にすぐさまぶつかって、また左に鋭角に折れる。つまりその折れかたが鋭くて、よくある稲妻の図柄に近くなっているから、戯れに、稲妻小路と呼んだ。

小路に影をもたらず樺は、じつに樹齢の行ったものだった。おそらくは区の保護樹木に指定されていただろう。家を建てる際、わざわざ樹の幹を囲い込むように設計したらしかった。